

「除染」機に地域再生

自分たちの地域は自分たちで守る。使命感に燃え、立ち上がった人たちがいる。除染作業によって希薄になりつつあったコミュニティが結束、停滞していた自治会活動が再び動き出した。



自ら地域を守る自治会除染

国から「汚染状況重点調査地域」の指定を受けた一関市では、自治会や個人が自ら除染作業に取り組んでいる。市は、2012年春から学校などの教育施設や公共施設の除染を行ってきた。しかし、国の除染基準である毎時0・23マイクロシーベルト(高さ1メートル以上のホットスポットは市内に6137カ所もあり、市は、自治会や市民に協力を呼び掛け、協働で除染を実施している。

このうち千厩町の小田梅田自治会(柴田律夫会長、104世帯)と花貫自治会(金野良悦会長、63世帯)は、市内で最も早い昨年11月23日に除染を行った。35カ所のホットスポットが確認された小田梅田自治会は、一人暮らしや高齢世帯が多いことから自治会で除染することを決定。市職員から説明を受けた住民約20人は、線量計で数値を確認後、市が貸し出した用具で住宅軒下の側溝土砂を

取り除いたり、表土を除去したりした。20日に市職員から除染方法の指導を受けた花貫自治会は、自治会員約30人が6グループに分かれて24カ所を除染。表土除去、天地返し、覆土などの作業を行った。花貫自治会の金野会長は「自らできることは実践し、地区民の安全と健康を守りたい」と話している。

除染でつながるコミュニティ

両自治会とも除染への住民参加は良好だった。小田梅田自治会の柴田会長は「地域を守りたい、子供たちの健康を守りたいという強い使命感を感じた」と振り返る。都市化が進む小田梅田自治会は、古くからこの地に生きる住民とUJターナー者が共存する独特な地域。

近年、自治会活動への参加者は固定化しつつあり、参加・不参加の二分化が進んでいるという。多くの人が参加する自治会活動を模索していた

柴田会長は、千厩地域のまちづくりワークショップで自治会運営の課題と問題点を検証。今後の方向性を見出した。「除染をはじめ参加率の高い活動に共通していたことは充実感。安全を確保した、きれいになったなどの成果に対する充実感だけでなく、内面的な喜びが大きい」と語る。

自治会内で連鎖する感謝の心

同自治会には雇用促進住宅があり、東日本大震災で被災した人たちが暮らしている。自治会と被災者が一体となつて草刈り作業に汗を流し、その後のミニ運動会や芋煮会などで相互の親睦を図りながら、自治会の mottoである「縁と絆」を深めている。

柴田会長は「参加してよかった。またやりたい」と思える地域住民に寄り添った活動が重要と考え、NPO法人が企画した京都女子大の先生による料理教室を開催。塩分控えめ

のバランス健康食を世代を超えて一緒に作り、みんなで食べた。会話が弾んで互いの距離が縮まった。本年度は、一人暮らしのお年寄りの見守りも兼ね、みんなでお弁当を作つて届ける計画も。「お変わりないですか。みんなで作つたお弁当をどうぞ」「どうも、ありがとう」

こうした心のキャッチボールを大事にしていきたい、とやさしさをにじませる。

「ありがたいと言われると、うれしくなる。うれしいから、また、やりたくなる。ありがたいは感謝の心が連鎖する魔法の言葉」

誰かに喜んでもらえたり、誰かの役に立ったりすることで幸福感を得られる活動こそ、同自治会が目指す人が集い、共感する自治会活動。柴田会長は「自治会除染を機に、人や地域がつながった。他の自治会も希薄になりつつあるコミュニティを再生するチャンス」と呼びかける。

小田梅田自治会会長 柴田律夫さん

「集い力」「共感力」が「行動力」につながる 課題解決の突破口は地域の中にある

Sibata Norio

1948年生まれ。「縁(えにし)と絆(きずな)」を深めて、地域の総合力アップを目指す。「除染は、今を生きる私たちにしかできないこと」を訴えて、「放射能汚染のないクリーンないのちのせき」を宣言する日が来ることを念じて活動中。千厩町在住、65歳。



藤 沢町の自治会活動や大東町京津畑地区の地域づくりが理想だ。中でも、京津畑の人たちのすごさは、楽しく取り組んでいること。みんなで喜びを分かち合っているから、継続できるのだと思う。

昨夏、一関市を含む北上高地(山地)が国際リニアコライダー(ILC)の国内建設候補地に選ばれた。私たちは、ILCの専門家ではないので研究はできないが、研究者が住み

やすいまちをつくることはできる。市民がいち早く除染に取り組んだ「住民力」をアピールできれば、一関のイメージアップにもつながると思う。

自治会運営のキーワードの一つは「集い力」。縁あつて同じ地区に暮らすあらゆる世代の男女が集い、絆を深めることが大事だと考えている。二つ目は「共感力」。共感する自治会員を増やしたい。人は、誰かの活動に胸を打たれた

り、誰かの言葉に心を動かされたり、感動によって行動する生き物だ。共感力を高めることが「行動力」につながっていくと思っている。

少子高齢化が加速している今、「限界」になる前に、再生に向けた知恵を絞り、手を打つことが大事だ。その主役こそ「自治会」。わが家はもちろん、よその家にもおせっかいをやく関係を築きたい。

勝部修市長は「住民起点」を行動の基本に掲げている。相手と同じ位置に立つて物事を考え、「行動する」という意味なそうだが、市職員だけでなく、私たち住民にもその考えが必要ではないか。

私 ここに生きている。ホットスポットだからと、生活の場所を変えるわけにはいかない。場所を変えるのではなく、人が変わるのだ。人が動くのだ。除染は難しくない。危険な作業でもない。やろうという意識さえあれば、

明日にでもできる。「うちには子供がいらない、孫がいらないから関係ない」ではなく、同じ地域で暮らす「縁」を深め、共に生きていく「絆」を強くして、互いに支え合う地域をつくっていく。

そのためには、相手と同じ位置にわが身を置いて物事を考えることが基本だ。それが「集い力」や「共感力」を生み出し、地域の課題や問題を解決する「行動力」へとつながっていく。

5月ごろを「除染強化月間」などと位置付け、全市で取り組んでどうか。すぐに結果は出なくても、そういう努力を重ねることが、必ず将来につながっていく。何もかも行政任せにするのではなく、地域が自立していくための仕組みを自ら考え、実行していく。行政はその過程や活動を支援する。そんな関係を築いていきたい。課題解決の突破口は、地域の中にこそある。